

進化する流行の発信地「国際通りのれん街」

沖縄県那覇市の国際通りに、新たな賑わいスポットが登場した。通りの中心に位置する空きビル内に各種の飲食店が軒を連ねる屋台村「国際通りのれん街」だ。昨年12月までに「那覇市場」「国際通り横丁」の施設内2区画が先行開業し、沖縄料理の店が並ぶ「琉球横丁」、全国の特徴あるラーメン店が並ぶ「沖縄元祖ラーメン横丁」の2区画が2月1日にオープンしたことにより、4区画全32店舗が出そろった。

のれん街が入居するビルには、デパート「沖縄三越」があった。われわれの世代にはショッピングに出掛ける楽しさに加え、屋上遊園地や併設の映画館など家族で過ごした思い出がよみがえる場所でもある。だが、大型駐車場を備えたショッピングセンターに客足を奪われる流れにあらがえず、2014年9月の閉店で57年の歴史に幕を下ろした。

戦後に闇市などから自然発生的に商店街が形成され、流行の発信地を担ってきた国際通り。90年代の沖縄ブーム以降は中心観光地として修学旅行生らを引きつけてきた。近年はアジアを中心に外国人観光客でごった返し、文字通りの国際化を肌身で感じさせる。

沖縄三越が集客に苦戦したとはいえ、国際通り自体に人が少なくなったわけではない。ただ、通りの客層が地元客から観光客へと大きく入れ替わった。通りに並ぶ店舗もデパートや映画館、書店といった身近な商売から、土産物や飲食が中心の光景に移り変わった。2016年度的那覇市民意識調査では、国際通りの利用度が「月1、2回以下」という回答が85・4%を占めた。通りに携わる人々にとって、いかに地元客を呼び戻すかの悩みは深い。



旧沖縄三越閉館後の施設を利用して開業した屋台村「国際通りのれん街」＝沖縄県那覇市牧志

沖縄三越閉店後の空きビル利用は、これまでも試行錯誤を繰り返してきた。飲み屋区画が午前4時まで営業する「国際通りのれん街」の出店は、沖縄の夜を長く楽しみたいという観光客のニーズに応じて繁盛を見せている。利用客を見ていると沖縄の若者も多い。地元客の集客の行方は老舗デパート跡地の再生、ひいては国際通り進化の鍵を握る。

琉球新報社編集局 経済部長／与那嶺松一郎



「国際通りのれん街」の店内の様子